

藤田博史講義 セミネール断章

榊山裕子編

人類の歴史に深く刻みこまれるであろう 2001. 9. 11 アメリカの連続爆破テロ事件に世界が揺れるなか、開催された今回のセミナーでもこのことが話題にならないはずはなかった。今回は「セミナー断章」でも、精神分析の立場から見たテロリズム考察の一部を採録する。

第4回セミナー 「皮膚/体感(その2) + テロリズムについての諸考察」

会場：早稲田奉仕園(東京・早稲田)

日時：2001年9月20日(木) 19:00~21:00

今、私の頭の中にあるのは、恐らくフロイトが生きた時代も戦争をやっていたわけで、どうして人類は人を殺したり、悪者を仕立て上げて攻撃を加えたりするのだろうかということです。私の掲示板にも書きましたが、フロイトとアインシュタインの書簡があります。

Warum Krieg? 英語に訳すと WHY WAR? ここでフロイトが考えたのは「死の欲動」です。人間は生きていこうというエネルギーだけではなく、死のうとするエネルギーもまた同時に持っている。フランス語で *pulsion de mort* (註1) と言いますが、要するに平和を唱える人もそうでない人も、死に対する一定の「欲動」を持っている。それは個人レベルで見てもそうだし、集団レベルでもそうであるということです。

もし精神分析に何か出来ることがあるとすれば、個人の中で洗いざらい見つけ出したものを、個人の寄り集まりである集団に対して適用できるかどうかということです。どういふことかということ個人レベルではかなり明らかになっていること、たとえば先ほど私が申し上げた「言い間違い」とか「やり損ない」(註2)、あとは精神病の症状、神経症の症状を含め、個人レベルではかなり明らかになっていることが、集団レベルでどこまで使えるかどうかということです。要するに人間が作ったものは人間の形をしているという大原則に従うならば、個の寄り集まりである集団も、恐らくその集団全体として、ひとつの生き物のように、精神分析の適用がなされ得るのではないかと、という発想も成り立つわけです。

ご存知の方もいらっしゃると思いますが、フロイトの『集団心理学と自我の分析』(註3) という論文があります。これははじめてフロイトが、集団に対して精神分析を適用できるかどうかということを考えて論文ですが、まずそこに尽きるでしょう。要するに個人のレ

ベルではかなり分析が進んでいると。では集団 集団といっても二人以上なら集団ですが、国家レベルとかの集団の動きに対して、どの程度まで精神分析を適応できるのか、あるいはどこから適応不可能なのか、ということです。

「横断歩道みんなで渡れば怖くない」という言い方があるように、恐らく集団特有の精神分析があると思うのです。私が思うに、集団が集団であることの所以というのは、言葉の繋がりで、要するに言語と同じ構造で繋がっている。つまり一番繋がりがやすいのは、同じ言葉を話す人間同士なのですが、言葉によって捉えられた人間が、不可避免的に持っている衝動というのは「死の欲動」です。つまり我々が個人のレベルにおいて言葉を話し続けるということは、逆に言えば言葉以前の生き生きした我々の生身の身体を言葉によって蝕まれている、つまり言葉によって殺され続けている、言葉を発声しながら連続的に言葉によって我々は殺されている、という風に考えることが出来るわけですが、まさにそういう意味において、我々の「欲動」が言葉によって抑圧される限り、最終的に言葉によって倒されて、「死の欲動」がまた人類の「欲望」を覆うのではないかと、ということです。

註1 「死の欲動」 *pulsion de mort* フロイトの後期の欲動理論においてつかわれた言葉で生の欲動に対立し、また緊張力の完全な除去に向うような、つまり生体を無機の状態に導くような欲動の基本的範疇を指す。

死の欲動は最初は内部に向い、自己破壊に傾くが、二次的には外部に向い、攻撃欲動または破壊欲動の形で顕現する。
(ラブランシュ/ボンタリス『精神分析用語辞典』みすず書房)

註2 「失策行為」(言い間違い、書き間違い、度忘れ、やり損ない、思い違いによる錯誤行為など)を指す。

註3 『集団心理学と自我の分析』(Massenpsychologie und Ich-Analyse) 1921